

演題 2

当院の深部静脈血栓症スクリーニングにおけるDダイマーと下肢静脈エコーを用いた検討

泉屋 直輝¹⁾、榎木 美佳¹⁾、飯尾 洋紀¹⁾、武藤 愛¹⁾、柳田 裕起¹⁾、胡内 久美子¹⁾、
吉村 豊¹⁾、中村 文彦¹⁾
奈良県総合医療センター¹⁾

【はじめに】

深部静脈血栓(DVT)は、我が国において死亡者が増加傾向にある肺塞栓症の主な原因であり、その早期発見及び治療を行うことは非常に重要である。DVT診断のアルゴリズムでは、まず問診、診察をおこない、疑いがあれば選別診断としてDダイマーを測定し、確定診断として下肢静脈エコーなどを実施するとされている。しかし、Dダイマーに試薬間差があることや、年齢とともにDダイマー値が上昇することから従来のカットオフ値は適切でない可能性が示唆される。また今回の検討データをもとにROC曲線を作成し、カットオフ値を算出したところ、偽陰性が多数見られた。そこで今回、凝固系に異常がないと考えられる60歳以上の患者について各年代のDダイマーの平均値を算出した。またDダイマー測定と下肢静脈エコーをおこなった患者のデータから年代別平均値を超えた場合のみ下肢静脈エコーをすることの有用性について検討をおこなった。

【使用機器および試薬】

ACL TOP 550 CTS (アイ・エル・ジャパン株式会社)

D-Dimer HS 2000(アイ・エル・ジャパン株式会社)

【対象と方法】

- 1) 2017年1月～2月にかけて当院にて止血検査をおこなった凝固系異常がないと考えられる高齢患者79名を対象として各年代のDダイマー値の平均を算出した。内訳は男女比1:3.4、年齢60～88才、平均71.65才であった。
- 2) 2016年8月～2016年12月にかけて当院にてDVTが疑われDダイマーの測定と下肢静脈エコーを施行した高齢患者は73名であった。内訳は男女比1:3.1、年齢62～89才、平均76.6才であった。
- 3) 2)の患者群に対して対象1)で算出した平均値をカットオフ値とし、下肢静脈エコーを行う患者数を減少させることが可能か検討した。

【結果】

下肢静脈エコーでDVTが発見されたのは17例で発見率は23.2%であった。DVT群のDダイマー値は3.9～162 μ g/ml(平均31.2)であったのに対し、非DVT群のDダイマー値は0.2～98.6 μ g/ml(平均12.8)であり、DVT群は有意に高値を示した($p<0.05$)。また凝固系異常がないと考えられる高齢患者79名を対象としたDダイマー値の平均値はそれぞれ60代で1.3 μ g/ml、70代で1.5 μ g/ml、80代は

2.5 μ g/mlであり、年代が上がるごとに平均Dダイマー値は上昇した。この平均Dダイマー値を超えた場合のみ下肢静脈エコーをおこなうとすると、下肢静脈エコーをおこなう患者を14名減らすことができ、全体で19.1%の削減につながった。また今回の検討では、カットオフ値を上げることによる見落としは無かった。

【考察】

今回の結果から、高齢患者はDダイマー測定を先行し、高齢者の各年代の平均値を超えた場合のみ下肢静脈エコーを施行することで19.1%削減することが可能である。またカットオフ値を上げることによる見落としはなかった。今回、Dダイマーが高齢になるほど上昇したのは代謝が低下するのに加え、血管の動脈硬化に伴うものと予想される。しかしDダイマーの上昇が代謝低下や動脈硬化によるものか、DVTによるものか判別できないため、カットオフ値を上げることには一定のリスクを伴う。カットオフ値の変更のためにはさらに症例数を増やし慎重に検討する必要がある。

連絡先:0742-46-6001(2355)